

米国改革派ユダヤ教における多様なシオニズム解釈を探る —史料と現状からの報告—

石黒安里

要旨

本研究ノートは、米国改革派ユダヤ教のなかで、シオニズムに親和的な傾向がどのような文脈から生じ、また「シオニズム」はいかに解釈されてきたかという報告者の現在の研究課題の一部を報告するものである。

報告者は、2019年2-3月にかけて、改革派ユダヤ教の学校で知られるヒブル・ユニオン・カレッジに併設されている文書館、American Jewish Archives(AJA)で研究調査を行った。本報告では、その調査結果の一部を紹介する。また、報告者は上述の米国滞在期間のあいだに外務省の派遣事業である第二回カケハシ・プロジェクト「ユダヤ研究者派遣」に参加する機会に恵まれた。同プロジェクトのプログラムには、改革派系のシナゴグ Temple Israel of Hollywood へ訪れる機会があり、そこで面会したラビ・ジョン・L・ロソベ(Rabbi John L. Rosove, 1949-)氏はアメリカにおける改革派シオニスト団体(The Association of Reform Zionists of America)の総裁を務めた人物でもあった。

一種の米国滞在記を兼ねた本報告では、AJAに所蔵されている史料の紹介、およびラビ・ロソベ氏の見解を紹介する形で、歴史的解釈の変遷と現在の視点を交えながら米国改革派ユダヤ教のなかで、シオニズムに親和的な解釈を行う人々のシオニズム観について、その一側面を提示したい。

キーワード

米国改革派ユダヤ教、シオニズム、American Jewish Archives(AJA)、スティーヴン・S・ワイズ、ラビ・ジョン・L・ロソベ

1. はじめに

報告者は現在、米国改革派ユダヤ教内において「シオニスト」であると自認するラビたちがいかにして親シオニスト的傾向を有するに至ったのか、ということに関心を持っている。「20世紀アメリカ・ユダヤ思想家からみるシオニズム思想：その批判と受容の変遷史」という研究課題のもと、一般的にシオニズムには反対の見解を示してきた改革派から、なぜシオニズムに親和的なラビたちが生じてきたのか、彼らの「シオニズム」理解はいかなる文脈から生じ、またどのように「シオニズム」という用語自体を理解しているのかということを経験的変遷とともに提示することを目標にしている¹。

本研究課題遂行のために、2019年2月から3月にかけて、シンシナティ（米国）にある American Jewish Archives（以下、AJA）²で資料調査を行った。本研究ノートは、その調査の一部を報告するものである。また、同資料調査期間中の、2019年3月17日から24日にかけては、外務省の対日理解促進プログラムの一環である米国派遣事業、第二回カケハシ・プロジェクト「ユダヤ研究者派遣」に参加する機会に恵まれた³。二回目となる今回のカケハシ・プロジェクトでは、報告者を含む10名の若手研究者がロサンゼルスとサンフランシスコのユダヤ関連施設・機関（高等教育機関、シナゴグ、ミュージアムなど）を訪問した⁴。本プロジェクトの目的は、各専門家らとの会合や現地のユダヤ人コミュニティの人々との交流を通して、お互いの理解を深めるというものである。本研究ノートでは、とりわけ報告者の現在の課題と関わりの深いと思われる、Temple Israel of Hollywood で面会したラビ・ロソベ氏の「シオニズム」の見解を取り上げることで、現在の改革派ユダヤ教の中にも、親シオニズム的傾向を持つラビが存在している例を紹介する。



AJA の正面



（ともに筆者撮影） Temple Israel of Hollywood の入り口

2. 米国改革派ユダヤ教とシオニズム

改革派ユダヤ教の起源はアメリカではなく、ヨーロッパ大陸、特にドイツの文脈のなかから生じてきた。18世紀にユダヤ社会にもたらされた啓蒙主義とユダヤ人解放の影響を受け、近代化への応答として、19世紀初頭にユダヤ教の礼拝様式を変革することに端を発したものとして理解されている⁵。

しかし、ドイツとアメリカでは改革派の進展は異なる展開を見せた。米国において改革派の信条が公式に確定されるのは、1885年の「ピッツバーグ綱領」が発布されるまで待たなければならないが、Thomas A. Kolsky が端的に指摘するように、米国における改革派ユダヤ教は、ドイツ系ユダヤ人移民がアメリカ化していく過程と同時進行で発展していったという解釈が一般的である⁶。

シオニズムに対する改革派の公式見解としては、基本的にシオニズムには反対の姿勢を示してきた。その理由は、普遍的な立場を目指す改革派にとって、固有の民族性を強調するシオニズムは、アメリカ社会への順応の妨げになるという理解である。改革派ユダヤ教の反シオニズム的見解が最も明確に表れたものとして、1942年8月12日に、改革派のラビたちにより結成された反シオニスト組織である、The American Council for Judaism (ACJ)から出された、「非シオニスト・ラビらによる原則声明 (Statement of Principles by non-Zionist Rabbis)」という声明が挙げられる⁷。同声明には、パレスチナがユダヤ人にとって精神的にどれほど特別な場所であろうとも、政治的シオニズムを容認することはできないという内容が含まれていた。

このような改革派ユダヤ教の反シオニズム的な姿勢は、シオニズム運動に反対の立場でも、賛成の立場でもなく、静観の立場をとるといった「非シオニスト(non-Zionist)であるというよりは、むしろ「反シオニスト(anti-Zionist)」である、とする理解が、今日の改革派ユダヤ教とシオニズムの関係を論じる際の共通理解であるように思う⁸。この解釈は Dr. Jerome Chanes (City University of New York (CUNY) Graduate Center)からの指摘でもある(文末脚注27を参照)。

しかし、次頁の図1(左部分)が示すように、歴史的には、たとえそれが例外だという見解があるにせよ、改革派の中にシオニズムに親和性を持つ人物が存在したことは確かである。まず、改革派の基本的な反シオニズムの立場を表している代表的なものとして、「ピッツバーグ綱領」(1885年)、第5条を取り上げる。「ピッツバーグ綱領」(第5条)で明記されているように、ここでは、パレスチナへ帰還するということは想定されていない(図1参照)。この主張を根拠に、改革派はシオニズム運動に賛同することはできないと理解することができる⁹。

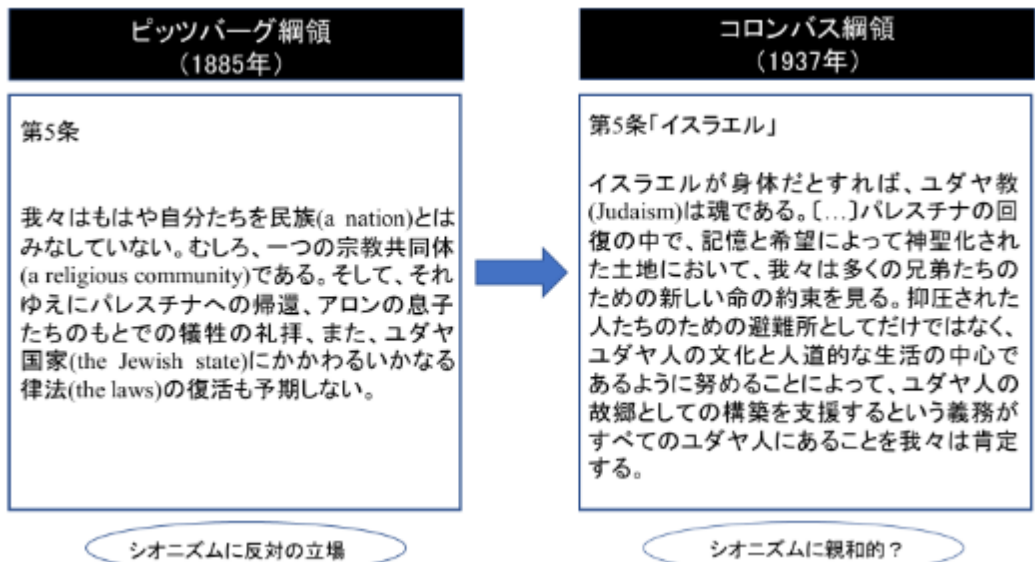
ところが、「ピッツバーグ綱領」の次に出された「コロンバス綱領」(1937年)では、シオニズムに親和的であるとも解釈できる文言が明記されているのがわか

る（図1、右部分参照）。

Michael A. Meyer が指摘するように、「コロンバス綱領」（1937年）の第5条には、同胞ユダヤ人の避難所が必要であると唱える政治的シオニズムと、ユダヤ人の文化の中心地（パレスチナ）を精神的に必要とする文化的シオニズムの両方の要素が入り込んでいる¹⁰。

このように、「ピッツバーグ綱領」と「コロンバス綱領」だけを比較してみても、米国改革派ユダヤ教のなかで、「シオニズム」を巡る見解が複数存在していることが明らかである。

図1



以下の Central Conference of American Rabbis のウェブサイトをもとに、筆者作成。「ピッツバーグ綱領」(<https://www.ccarnet.org/rabbinic-voice/platforms/article-declaration-principles/>) 「コロンバス綱領」(<https://www.ccarnet.org/rabbinic-voice/platforms/article-guiding-principles-reform-judaism/>) (最終閲覧日：ともに2019年10月18日)

3. スティーヴン・S・ワイズの親シオニズム的傾向：American Jewish Archives から

前章では、アメリカの改革派ユダヤ教においては、反シオニズム的見解が主流

派であることを示しながらも、「コロンバス綱領」を例に、改革派の中にもシオニズムに親和的な傾向があった点を確認した。

本章では紙幅の関係上、詳細な議論は割愛せざるを得ないが、米国の改革派ユダヤ教に内在する親シオニズム的傾向を持つ改革派ラビとして、スティーヴン・S・ワイズ(Stephen S. Wise, 1874-1949)を紹介したい。

ワイズは、1874年3月12日 ブダペスト(ハンガリー)で、改革派のラビ、アロン・ワイズ(Aaron Wise, 1844-1896)のもと生を受け、1歳の時にアメリカへ渡っている。ワイズは、1893年、改革派の流れを汲むウィーンのアドルフ・イエリネク(Adolph Jellinek of Vienna)よりラビの叙任を受け、1900年、オレゴン州、ポートランドのテンプル・ベト・イスラエル(Temple Beth Israel)のラビを務める。ワイズを最初から改革派のラビと断定して良いのかという問いも成り立つかもしれないが、むしろ、S・S・ワイズに限らず、少数派ながら当時の改革派の中にもシオニズムに親和的なラビは存在している(文末脚注5参照)。1898年、初の全米規模のシオニスト組織(Federation of American Zionists, FAZ)の設立に尽力した。同年より、1904年までFAZの名誉秘書を務めた。

その後、ワイズは既存の改革派に飽き足らず、より一層社会正義を実現できる場として、1907年にニューヨークで自ら The Free Synagogue を設立し、1943年までラビを務めた。ラビとして The Free Synagogue で社会問題に関心を持ちながらも、シオニストとしての活動も継続した。1914年、「シオニストの全般的事務を行なう暫定執行委員会」(The Provisional Executive Committee for General Zionist Affairs)の設置に尽力し、1917年、バルフォア宣言の条文作成を支援した。翌1918年には、The American Jewish Congress の創設に関わる。その後亡くなるまで、副会長、会長、名誉会長を務める。1918年以降、American Jewish Congress の活動に従事し、ヴェルサイユ会議(1919年)に American Jewish Congress の代表の一人として出席し、パレスチナのシオニストたちの願望を代弁した¹¹。1918-1920年、アメリカ・シオニスト機構(Zionist Organization of America, ZOA)の副代表を務め、1922-1948年にかけては、ラビ養成機関としてニューヨークに設立された The Jewish Institute of Religion(JIR)の学長を務めた。ちなみに JIR は超教派の立場を貫いていたが、もっぱら改革派の学徒たちが通っていた¹²。1936年、The World Jewish Congress(WJC)(ジュネーブ)の創設に携わり、執行委員会の議長を務めあげ、1940年代を通して、The American Emergency Committee for Zionist Affairs の議長を引き受け、1949年4月19日、ニューヨークで亡くなる。

彼がシオニスト活動に従事していた動機が端的に表れた発言は、1926年ロンドンで開催された The World Union for Progressive Judaism の会合での一節の中に見いだされる。

[...] 今夜、締めくくる前に、私たちシオニストがリベラルなユダヤ運動内に場所を占めなければ、歓迎される完全な場所を有するということを明確にしないならば、私は後悔するだろうし、あなた方も悔やむでしょう¹³。

ワイズの解釈では、リベラルなユダヤ教とシオニズムは矛盾するものではなかった。

本報告末尾に掲載した資料1は、AJAで収集した史料の一部であり、1936年4月1日、ワイズからサウル・オデス(Mr. Saul Odess)に宛てた三頁にわたる手紙の最終ページである。ワイズは、同手紙の冒頭で「ポーランドのユダヤ人が身体的暴力という最も恐ろしい形態の危機にさらされていることを信じるようになった」と述べており、続く頁を通して、パレスチナこそが、行く場所のない「ホームレス」化したユダヤ人を受け入れる場所であると語っている。今後4年間で約10万人ものドイツのユダヤ人を受け入れる用意がある場所(land)は、パレスチナの他にはないと記載している¹⁴。現時点では、推測の域を出ないが、この後、ワイズが1936年4月以降増加していくパレスチナのアラブ人による蜂起と自身のリベラルなユダヤ教に基づくシオニズム活動とのあいだに見られる大きな論理矛盾に対して折り合いをつけたのか、かりに折り合いをつけたとして、それはいかにしてか、あるいはワイズはそもそもパレスチナの動向に関しては無自覚であったのか、この点がワイズのシオニズム観を探るヒントになると考えている。

次章では、現代の改革派ラビの事例を取り上げる。

4. ラビ・ジョン・L・ロソベ氏による「シオニズム」解釈

4-1. Temple Israel of Hollywood 視察とラビ・ジョン・L・ロソベ氏との会合

2019年3月18日(月)午前、第二回カケハシ・プロジェクト「ユダヤ研究者派遣」の一環で、ハリウッド地域にある Temple Israel of Hollywood を視察した。同シナゴグは1926年に設立された改革派シナゴグとして知られており、Day School も隣接している。また、同シナゴグは1965年にマーティン・ルーサー・キング Jr.がビマー(説教壇)から会衆に向けて説教を行ったことでも知られている¹⁵。本報告第2章で扱ったように、一般的に改革派ユダヤ教においては、正統派と同様に、シオニズム運動ないしシオニズム思想に関しては反対の見解を示してきた。しかし、同シナゴグは改革派の一部に存在してきた、シオニズムに親和的な系譜を受け継いでいるシナゴグとしても知られている。中でも私たち一行が驚いたのは、マルティン・ブーバーなどに見られる精神的シオニズムだけで

はなく、テオドール・ヘルツルの『ユダヤ人国家』（1896年）の初版やゼエヴ・ジャボティンスキーのフランスでの ID カードなど、所謂シオニズム史の主流派に属する人物たちの文献や美術品関係をコレクションとして収集しており、その一部が展示されていたことだ¹⁶。これは、一般的な改革派ユダヤ教のシナゴグでは見られない光景であるといっても過言ではない。

同シナゴグ視察時に、ラビ・ジョン・L・ロソベ氏との面談の機会にも恵まれた。懇談の様子（私たち派遣団一行がラビ・ロソベ氏に質問した事項を含む）についてはラビ・ロソベ氏のブログ（*Times of Israel* 誌のブログにも掲載）に記事として掲載されているので参照されたい¹⁷。ここでは簡単にラビ・ロソベ氏の略歴を紹介し、次節で彼の「シオニズム」解釈について触れることにする。

ラビ・ロソベ氏は、1988年より同シナゴグでシニア・ラビを務めてきた（2019年6月に引退、現在は Rabbi Emeritus として活動）。ラビとしての職務と並行して、シオニズム活動に従事してきた人物でもある。ラビ・ロソベ氏は、The Association of Reform Zionists of America (ARZA)¹⁸の前代表(national chair)を務めた人物であり、また面会時には、J Street¹⁹の Rabbinic and Cantorial Cabinet の共同代表(co-chair)に再任されるなど、現代の米国のシオニズム活動の担い手の一人として知られている。

報告者は、資料調査で訪れた AJA で、Professor Dr. Gary P. Zola から、また、2018年の AJA 訪問時に、Professor Emeritus Dr. Michael A. Meyer より、「1937年に『コロンバス綱領』が出されるまでは、改革派ユダヤ教はシオニズムとは相いれない」、「シオニズム（の思想）とは全く異なるものであると考えられてきた」とご教示頂いた。改革派ユダヤ教とは一般的に「シオニズム」とは相いれないものである。だが、近年では必ずしもそうとは言い切ることができない²⁰。

それゆえにラビ・ロソベ氏のように、改革派のラビでありながら、同時にシオニズム活動にも従事するような人物が登場してきたことも理解ができる。結論を先取りするならば、改革派主流派が使用してきた「シオニズム」と彼が使用している「シオニズム」には隔たりが存在する。およそ100年前と今日ではその語の意味が異なるものとなった。換言すれば、ラビ・ロソベ氏が使用している「シオニズム」は、一般的に改革派ユダヤ教が「ピッツバーグ綱領」の時に使用してきた語法とは異なるものであると考えられる。

面会時に、報告者はラビ・ロソベ氏に、「今日『シオニズム』という用語はイスラエル政府による入植地の問題を含め、あまりにもネガティブな意味合いで使用されているように思われるが、どう思うか」という点を質問した。返ってきた答えを要約するならば、「我々（ラビ・ロソベ氏たち）が求めるシオニズムは政治的シオニズムとは隔絶したものである。むしろ、今の時代に、（我々が）真の『シオ

ニズム』の（意味）を（世界に）提示していく必要がある」というものであった。では、彼の語る「真のシオニズム」とは一体何か。次節において紹介する。

4-2. ラビ・ロソベ氏の「シオニズム」解釈

ラビ・ロソベ氏の著書、*Why Judaism Matters*（2017年）は、彼自身の二人の息子、ダニエルとデイビッドへ宛てた手紙形式で、彼の次世代（ミレニアル世代）へ伝えたいリベラルなユダヤ教の見解を綴ったものである。テーマは家庭生活、善悪の問題、良き人生を歩むための秘訣、戦争と平和など多岐にわたる。ラビ・ロソベ氏のシオニズム解釈が最も顕著に表れているのは、第3部「善悪の世界、戦争と平和の只中に生きること(“Living in the World of Good and Evil, War and Peace”)」においてである²¹。彼は今日のイスラエル政府の西岸の政策に対して、民主主義が実行されていないとして批判的である²²。しかし、ラビ・ロソベ氏は自身が「シオニスト」である、ということを放棄することはない。彼は自覚的に「リベラルなシオニスト(a liberal Zionist)」²³であると述べている。むしろ、アメリカ在住のユダヤ人もイスラエル国家との関係は不可分であるという解釈のもと²⁴、申命記16章20節の「ただ正しいことのみを追求しなさい。そうすれば命を得、あなたの神、主が与えられる土地を得ることができる」(新共同訳)を引用し、「正義」を貫いていくことが、シオニストとしての責任であると理解しているようである²⁵。ただし、この箇所では、「正義」を貫くことの実例は示されていない。例えば、イスラエル政府への問題解決のための提言などはなされていない。

ラビ・ロソベ氏にとってのシオニズム活動とは、主に上述のARZAといったシオニスト団体に所属することで体現されている。ARZAの目的は、大別して以下の二点に集約することができる。①米国在住の改革派に属するユダヤ人にとって、アイデンティティ存続のためにイスラエルが重要な役割を果たすものとみなし、そのためにイスラエルという存在を必要とすること。頻繁にアメリカからイスラエルへ視察団を派遣すること（個人レベルでイスラエル訪問を促す場合もある）、②イスラエルが多元的且つ民主的な国家となるように促すこと、である。

5. 今後の展望

本研究ノートでは、米国改革派ユダヤ教が「反シオニズム」的な傾向一辺倒なのではなく、むしろ、歴史的にシオニズムに親和性を示したラビがいたこと、そして今日においても「シオニズム」という用語を放棄せずに、そこに新たな解釈を付け加えることで、「シオニスト」として活動している一人のラビの事例を紹介した。本研究ノートは、報告者の米国滞在記として、シオニズムに親和的な過去

と現在のラビたちの事例（具体的には、S・S・ワイズとラビ・ロソベ氏の事例）をもとに紹介したが、両者の事例を同列に考察することはできない²⁶。ワイズがシオニズム活動に従事したのはイスラエル国家建設以前であったのに対し、ラビ・ロソベ氏の事例はイスラエル国家建設後であることから、少なくとも、こうした両者の文脈の違いに立脚した考察がなされるべきである。本研究ノートでは十分な情報を掲載できなかったが、現段階で断言するのは難しいものの、あえてその方向性を示すとするならば、S・S・ワイズとラビ・ロソベ氏を繋ぐ鍵となる用語、「リベラル」なユダヤ教、あるいは「リベラル」なシオニズム、すなわち、ラビ・ロソベ氏の「シオニズム」理解を取り上げた際に説明した、社会正義の実現を目指すという意味での「シオニズム」の探求を進めていくことになるであろう。

現在、報告者は米国改革派ユダヤ教の中にシオニズムに親和的な傾向を持つラビが存在したことをS・S・ワイズを事例に検討している。しかしその一方で、次のことを合わせて考察する必要性が指摘できる。それは、S・S・ワイズや、ユダ・L・マグネスらに見られるシオニズムに親和的な改革派のラビが「改革派」の主流派を代表するものではなかったという事実である。むしろ、彼らは改革派のラビの称号を持ちながらも、独創的な仕方でユダヤ教を解釈した人物にすぎないのであり、米国改革派ユダヤ教の代表的な存在ではなかったという指摘に対して考察することが求められている²⁷。

- 3 -

As you know, the fund-raising instrument in the United States of the Jewish Agency for Palestine is the United Palestine Appeal, which is seeking \$3,500,000 during 1936 for the settlement in Palestine of a maximum number of the Jews of Germany and other lands. The United Palestine Appeal is one of the participant organizations in the Council for German Jewry, headed by Sir Herbert Samuel, which is sponsoring the program for the emigration of 100,000 German Jews during the next four years.

The members of this Council have repeatedly emphasized that at least half, and probably more, of the German Jews would go to Palestine. In truth, there is no other land ready to accept them in such large numbers. To carry out this great program large funds are essential.

This week the Council for German Jewry announced in London that its first official act is the allocation of \$1,250,000 this year for the settlement of German Jews in Palestine. This allocation was made possible because the United Palestine Appeal pledged to the Council the sum of \$250,000 for this one item, if American Jewry's response will make it possible to do so. This is in addition to the regular program of the Jewish Agency for the colonization of Jews, the purchase of land and the general development of the Jewish homeland which the United Palestine Appeal is helping to finance.

When you think of the Jewish situation abroad this Passover, will you not consider the facts presented above? It is customary that during this season Jews in America express their gratitude for the liberty which is their own by making generous contributions to the cause of those who still need to be liberated.

As National Chairman of the United Palestine Appeal, I would be deeply grateful for a Passover message from you that you are contributing to the historic work which we are doing: enabling Jews to get out of the dark lands of intolerance into the bright haven of freedom in Palestine.

Faithfully yours,



Stephen S. Wise
National Chairman

資料 1: Letter from Stephen S. Wise to Mr. Saul Odess (April 1, 1936), (3 of 3 pages)
MS49, Box4, Folder 8, AJA

S・S・ワイズが友人、サウル・オッデス(Mr. Saul Odess)に宛てた手紙はちょう

ど過越しの祭りの時期に出されたものである。The United Palestine Appeal(UPA)の代表(National Chairman)としてワイズは、4段落目で次のように述べている。「この過越しの祭りに際し、海外のユダヤ人の状況を想う時、上述の現状(ドイツやヨーロッパ諸国のユダヤ人の惨状)を考えずに済むでしょうか」。このように、ワイズはオッデスに問いかけ、不寛容な暗い大地からドイツのユダヤ人をパレスチナの自由で輝くヘブレンへと解放する事業への貢献に対して、オッデスに感謝の言葉を述べる形で手紙は締めくくられている。

*UPA は 1925 年に創設された、ドイツ内外のユダヤ人のパレスチナへの入植を援助するためのアメリカ主導の基金団体である。1936 年に再編成されている。



ラビ・ジョン・L・ロソベ氏と第二回カケハシ・プロジェクト参加者
(上段左から4番目の人物が、ラビ・ロソベ氏)

※ 出典: Asia Pacific Institute : Quarterly Update より。

<http://links.ajcglobal.org/servlet/MailView?ms=MzY0ODgxNQs2&r=ODU5MTI2ODIzODAS1&j=ODIwMDM4MDAwS0&mt=1&rt=0> (最終閲覧日: 2019年11月6日)

謝辞

※1 2019年2月4日～3月29日(カケハシ・プロジェクト参加期間を除く)にかけて行われた American Jewish Archives(AJA)での資料調査は、日本学術振興会(JSPS)科学研究費、若手研究(18K12210)の後援による。

※2 American Jewish Archives(AJA)での資料調査では特に Prof. Dr. Gary P. Zola、Dr. Dana Herman に大変お世話になった。Zola 教授は報告者がスティーヴン・S・ワイズのシオニズム観に関心があること知り、ワイズの Free Synagogue での説教の

肉声データの一部を、文字起こしデータと共に聞く機会を提供して下さった²⁸。また改革派ユダヤ教の歴史に関する講義(“Reform Judaism: Then and Now”)の聴講を快く許可して下さった。Herman 博士にはアーカイブで円滑に調査を進める段取りに加えて、シンシナティでの慣れない生活面に関しても温かいお心遣いを賜った。

※3 第二回カケハシ・プロジェクト「ユダヤ研究者派遣」(2019年3月17日～24日)への参加を可能にし、貴重な機会を与えて下さった関係者の皆さま、特に American Jewish Committee(AJC)ロサンゼルス支部代表の Dganit Abramoff 氏ならびに Youth For Understanding (YFU)の Barb Kilkka 氏に心より感謝申し上げます。また、派遣プロジェクトのリーダーとして、本プロジェクトが北米ユダヤ・コミュニティと日本との絆となるように率先して尽力し、私たち派遣メンバーのことを常に気にかけて下さった鴨志田聡子博士、志田雅宏博士にこの場を借りて謹んで御礼を申し上げます。

注

- ¹ 本課題の一部は例えば以下の拙論で取り扱っている。石黒安里「1900年代から1920年代における文化的シオニズムのアメリカ化—アハッド・ハム受容のプリズムとしてのマグネス、カプラン、カレン—」『一神教世界』第9巻、同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)、2018年3月、1-18頁; Anri Ishiguro, “Progress and Ambiguities: Kaufmann Kohler’s Vision for Jewish Women and Zionism during the Transitional Period of the Reform Movement,” in *Proceedings of the Third International Symposium on Jewish Studies Judaism in Modern Era: Interpretative Studies of Ancient and Current Texts*; Held at the Hebrew University of Jerusalem, August 19th 2018 (Ed. Ada Taggar Cohen; Kyoto: Doshisha University, The Center for Interdisciplinary Study of the Monotheistic Religions, 2019), 102-111.
- ² AJA (正式名称、The Jacob Rader Marcus Center of the American Jewish Archives)は、1947年、アメリカ・ユダヤ史の研究者であった、Dr. Jacob Rader Marcus (1896-1995)によって、ヒブル・ユニオン・カレッジ (シンシナティ校)のキャンパス内に設立された。同アーカイブ設立に纏わる詳細は以下を参照されたい。Jacob Rader Marcus, “The Program of the American Jewish Archives (1948)” in *The Dynamics of American Jewish History: Jacob Rader Marcus’s Essays on American Jewry* (Gary Phillip Zola ed.; Hanover, London: Brandeis University Press, University Press of New England, 2004), 108-115.
- ³ カケハシ・プロジェクト「ユダヤ研究者派遣」は2017年度に第一回目となる派遣が行われた。第一回目は7名の若手研究者が東海岸(ニューヨーク、ボストン)を訪問した。以下のウェブサイトから第1回目のニュースレターが閲覧可能。
<http://alderekhhaemet.blogspot.com/2018/06/newsletter-kakehashi-project-2018.html> (最終閲覧日: 2019年7月25日)
- ⁴ 第二回目の訪問先などの詳細は、一般財団法人 日本国際協力センター(JICE)の以下のサイトに掲載されている。

-
- <https://www.jice.org/exchange/report/2019/05/kakehashi-project-2019317324.html> (最終閲覧日：2019年7月25日)
- 5 改革派ユダヤ教の展開と、ドイツ系ユダヤ人のアメリカ社会への同化とアメリカでのアイデンティティ保持との葛藤などに関しては、以下の書籍を参照。Michael A. Meyer, *Judaism within Modernity: Essays on Jewish History and Religion* (Detroit: Wayne State University Press, 2001). 本稿では紙幅の関係上、取り上げることができないが、Meyerは同書の中で、改革派ユダヤ教内に生じた「シオニスト」の事例として、Abba Hillel Silver (1893-1963)を取り上げている。
 - 6 Thomas A. Kolsky, *Jews Against Zionism: The American Council for Judaism, 1942-1948* (Philadelphia: Temple University Press, 1990), 20-22.
 - 7 MS 17, box 6, folder 1, American Jewish Archives. 同文書は以下の史料集にも収録されている。Gary Phillip Zola and Marc Dollinger (eds.) *American Jewish History: A Primary Source Reader* (Waltham, Massachusetts: Brandeis University Press, 2014), 253f.; Kolskyの以下の分析も参照。Thomas A. Kolsky, *Jews Against Zionism*, 54f.
 - 8 別の見解としては以下を参照されたい。Jack Wertheimerは著書の中で、むしろ1937年まで、改革派のラビたちは敵愾心とは区別する意味で (the American Council for Judaismのような反シオニスト的立場とは異なるという意味において)、シオニズムに対してはニュートラルな姿勢をとっていた、と解釈している。Jack Wertheimer, *How Jews Practice Their Religion Today: The New American Judaism* (Princeton, Oxford: Princeton University Press, 2018), 107.
 - 9 テオドール・ヘルツルが『ユダヤ人国家』を出版したのは1896年、その翌年、第一回シオニスト会議が開催されていることから、「ピッツバーグ綱領」が出された時点(1885年)では、改革派ユダヤ教が反対だとするシオニズム運動はまだ存在していない。しかし、1937年の「コロンバス綱領」が出されるまで、改革派ユダヤ教では、シオニズムに反対する説明の根拠として、「ピッツバーグ綱領」が引き合いに出される場合が多い。
 - 10 Michael A. Meyer, *Judaism within Modernity*, 320.
 - 11 Stephen Wise, *Challenging Years: The Autobiography of Stephen Wise* (New York: G. P. Putnam's Sons, 1949), 206-208.
 - 12 ちなみに、JIRは1949年(ワイズが他界する年)にHUCと合併している。Mark Lee Raphael, *Profiles in American Judaism: The Reform, Conservative, Orthodox, and Reconstructionist Traditions in Historical Perspective* (Harper & Row, 1984), p. 54.
 - 13 Stephen S. Wise, "Zionism and the Liberal," in *The Growth of Reform Judaism: American and European Sources* (W. Gunther Plaut ed.; Philadelphia, The Jewish Publication Society, 2015), 150f.
 - 14 この発言が、直ちにイスラエル・ザングウィル(Israel Zangwill, 1864-1926)の悪名高いスローガン「民なき土地に土地なき民を」に示される神話を、ワイズも無自覚にも受容してしまっていたのではないかと思わされる発言であると解釈することも可能であろう。しかし、この点に関する判断は、他の関連資料を参照し、慎重に検討する必要があると思われる。
 - 15 Temple Israel of Hollywoodにおけるマーティン・ルーサー・キング Jr. の説教(1965年)は以下のURLから視聴できる。
<https://www.americanrhetoric.com/speeches/mlktempleisraelhollywood.htm> (最終閲覧日：2019年7月25日)
 - 16 同シナゴグの展示の様子は、第二回カケハシ・ニュースレターを参照されたい。
<http://alderekhhaemet.blogspot.com/2019/08/newsletter-kakehashi-project-2019.html> (最終閲覧日：2019年10月31日)

-
- 17 ラビ・ロソベ氏によるブログは以下の URL を参照。
<https://rabbijohnrosove.wordpress.com/2019/03/19/10-young-japanese-scholars-of-judaism-and-jewish-history-visit-los-angeles-times-of-israel-blog-march-19-2019/> (最終閲覧日：2019年7月25日)
- 18 The Association of Reform Zionists of America (ARZA)は1978年にサンフランシスコで開催された改革派の年2回開かれる会合の場で結成された。Rabbi John Rosoveによる2018年7月2日の記事より(<https://jewishjournal.com/blogs/235631/american-reform-movement-accepts-jerusalem-program-world-zionist-organization-becomes-zionist-movement/>) (最終閲覧日：2019年7月25日)。
- 19 J Street は米国のイスラエル・ロビー団体の一つであり、2008年に設立された。既存のイスラエル・ロビーの中で最も影響力が高いと言われる AIPAC のイスラエル政府に対する無批判な姿勢・政策に賛同できない世代によって結成された。J Street は現在のイスラエル国家のパレスチナに対する政策を強く批判し、ヨルダン川西岸での入植活動やガザ地区への軍事政策に異議を唱えるという点で、既存のイスラエル・ロビーとは異なる主張を展開している。J Street の公式ウェブサイトより(<https://jstreet.org/>) (最終閲覧日：2019年7月25日)。J Street に関しては、以下も参照。立山良司『ユダヤとアメリカ：揺れ動くイスラエル・ロビー』(中央公論新社、2016年)。特に4-12頁および第5章参照。
- 20 脚注5で言及したように、Meyer もその著書の中で、改革派内部のシオニストに言及している。
- 21 とりわけ以下で論じられている。Rabbi John Rosove, *Why Judaism Matters: Letters of A Liberal Rabbi to his Children and The Millennial Generation* (Nashville, Tennessee: Jewish Lights Publishing, 2017), 58-68. 特に、58-61頁にかけて、ラビ・ロソベ氏がラビ養成学校の学生であるサラからの手紙の返答としてしたためた内容に加えて、61頁以降68頁までのラビ・ロソベ氏の加筆を参照されたい。
- 22 Rabbi John Rosove, *Why Judaism Matters*, 58.
- 23 Rabbi John Rosove, *Why Judaism Matters*, 57.
- 24 どこに住んでいようと、イスラエルとの紐帯は不可分である、という主張は随所に見られる。Rabbi John Rosove, *Why Judaism Matters*, 57, 61 and 67f.
- 25 「正義を貫くこと」に関しては、以下を参照。Rabbi John Rosove, *Why Judaism Matters*, 61ff.
- 26 ワイズが創設した Free Synagogue の現在シニア・ラビを務めているラビ・アミエル・ヒルシュ(Rabbi Ammiel Hirsh)は、ラビ・ロソベ氏も前代表を務めたアメリカの改革派シオニスト団体(ARZA)に12年間、執行役員として携わっていた経歴を持つ(<https://www.swfs.org/about-us/our-staff/member/307848/>) (最終閲覧日：2019年9月25日)。ラビ・ヒルシュは、ネタニヤフ首相の入植地政策に関して、「ネタニヤフ政権になってから、イスラエルとアメリカのユダヤ人の関係は悪化した」とし、超正統派の独占的な宗教的影響力」に屈服したネタニヤフ首相に苦言を呈している。Eric Cortellessa, “With Israeli election looming, liberal US Jews set their ire on Netanyahu,” in *The Times of Israel*, 5 April 2019.
<https://www.timesofisrael.com/with-israeli-election-looming-liberal-us-jews-set-their-ire-on-netanyahu/> (最終閲覧日：2019年9月25日)
- 27 この指摘は、The 35th Annual Conference of the Association for Israel Studies (2019年6月24-26日、Kinneret Academic College)において、報告者が行った報告(“Keeping Two Zions: The Ambiguity of Americanized Zionism in the Developing Context of Reform and Conservative Judaism”)に対し、Dr. Yitzhak Conforti (バルイラン大学)と Dr. Jerome Chanes

(City University of New York (CUNY) Graduate Center)から頂戴したものである。

- ²⁸ 今回の資料調査では、現在進行中のプロジェクトであり、且つ限られた時間のため、ワイズに関する説教の収集（肉声データの聴講）は十分に行えなかった。報告者が AJA 訪問時に聴講した 1940 年代のワイズの説教は、シオニズムとアメリカの民主主義が相反するものではない、という内容であった。これらの説教が具体的に誰によって収録されたものなのかは、2019 年 3 月の段階では明確でなかったため、引き続き調査の必要がある。仮に録音者が不明であった場合は、史料としてどの程度有効なのか、疑問の余地がある。しかしながら、単に活字上で説教の原稿を読むのとは異なり、聴衆の雰囲気、拍手などからワイズの説教がどのように聴衆に受け止められていたか、その様子を伺うことが可能である。そのため参考資料として、次回の調査時に本研究課題に必要と思われる説教に関して収集（聴講）することにしたい。